

令和8年度病害虫発生予察情報 注 意 報 第 1 号

令和8年2月13日
岩手県病害虫防除所

育苗期に細菌病が多発するおそれがあります！ 育苗期間中の温度・水管理に注意しましょう！

1. 対象作物、病害虫：イネ、細菌病類（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病）
2. 対象地域：県下全域
3. 発生時期：育苗期
4. 発生量：多
5. 予報の根拠

(1) 令和7年は、籾の感受性が高いとされる出穂・開花期にまとまった降雨があり、さらに高温で推移したことから、細菌病類の感染に好適な気象条件であったと推察される（図1）。

(2) 籾におけるもみ枯細菌病の検出率は28.0%（平年5.6%）で、直近10年で最も高い（図2）。

(3) 3か月予報では、4月（育苗期間）の気温は平年より高い予報（令和8年1月20日、仙台管区气象台発表）。

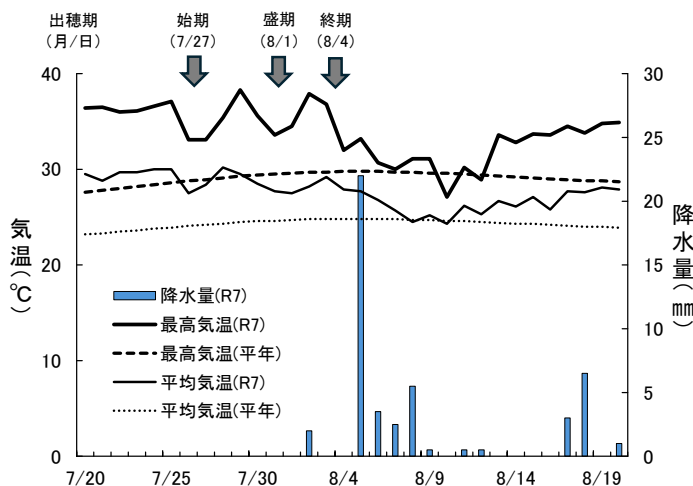


図1 令和7年における出穂期前後の気象経過（北上）

※ 図中の矢印は出穂期を表す

※ 出穂期は北上川下流（農作物技術情報 第6号より引用）のデータ

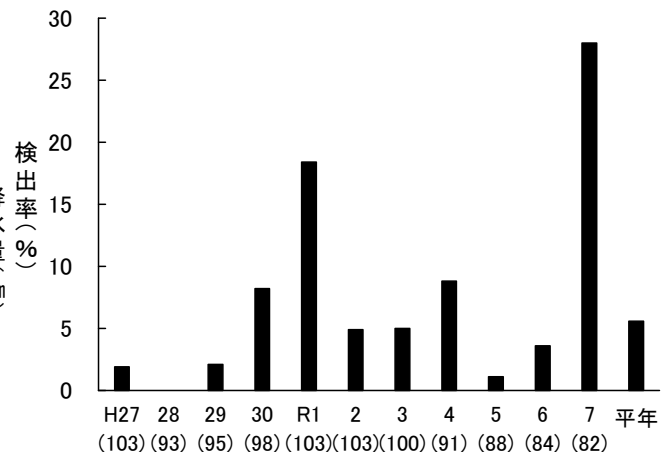


図2 もみ枯細菌病の検出状況の年次推移

※ 各年次下の（）内は検体数

※ 平年：H27～R6の10年間の平均値

※ H30、R1、R4年は翌年2月に注意報を発表



写真 細菌病の症状

葉鞘が水浸状に褐変し、葉鞘の途中から次葉が抽出したり、ねじれて出るなどの出葉異常が認められる。葉齢が2葉期以降に進んだ苗では、新葉の葉鞘や葉身の基部が白色から黄白色に脱色し、その後しだいに褐変枯死する。葉を手で引くと容易に抜け、その基部は褐変、腐敗している。

6. 防除対策

(1) 耕種的防除

- ・育苗期間中（特に催芽・出芽時、緑化～硬化初期）の高温は発生を助長するので、適正な温度管理に努める。
- ・プール育苗は、細菌病類の発生を抑制するのに効果的である。
- ・その他、種子予措および育苗期の留意点は以下のとおり。

<種子予措および育苗期の留意点>

項 目		対 策
種子予措	塩水選	○充実した種子を確保するため、可能なものは実施。ただし、消毒済種子の場合は、薬剤流出の危険があるため、実施しない。
	浸 種	○12～15℃とし、10℃以下にならないようにする。消毒済み種子の場合は、水換えは種子に付着した薬剤が落ちないように注意して静かに行う。
	催 芽	○28～30℃を厳守する。過度の加温や長時間の催芽は発病を助長するので絶対に行わない。 ○健全種子への感染拡大を防ぐため、水を強制的に循環させる装置を用いた催芽（循環式ハト胸催芽器等）は行わない。樽などを容器内に設置して種籾を入れ、催芽水を直接循環させないよう工夫すること。
育苗期	播 種	○所定の播種量を厳守する。
	出 芽	○ <u>出芽器の庫内温度は30℃を厳守する</u> 。過度の加温は発病を助長するので、絶対に行わない。
	ハウス温度 (慣行・プール 育苗共通)	○ <u>緑化期の温度管理（日中20～25℃）を徹底すること</u> 。 ○緑化後は、育苗ハウス及びトンネルの開閉をこまめに行い、 <u>育苗温度は25℃を超えないよう管理</u> する。
	かん水 (慣行育苗)	○過かん水は発病を助長するので絶対しない。
	プール育苗の 水管理	○緑化終了後2～3日以内に入水しないと細菌病類の抑制効果が期待できないので注意する（生育揃いを考慮して水深は培土表面より下とする）。 ○2葉目が出始めたら十分な湛水深を確保する（水深は培土表面より上）。

(2) 薬剤防除

「岩手県農作物病害虫・雑草防除に関する技術資料」に掲載している有効な薬剤で種子消毒を行うこと。
なお、イソチアニル粒剤（箱施用剤）の播種前又は播種時（覆土前）処理を併せて実施すると防除効果が高まる。

7. 留意事項

育苗期における管理の留意点については、今後発行される発生予察情報や農作物技術情報も併せて参照すること。

【利用上の注意】

本資料は、令和8年2月4日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・農薬使用の際は（1）**使用基準の遵守** （2）**飛散防止** （3）**防除実績の記帳**を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html>

